→たこ焼き文化を小説化―人情がいっぱい詰まった気軽な書

2023 年 3 月 12 日（日） カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 578 回 参加報告

生根神社の早咲き桜

その、かつて海岸だったという道をたどり六道辻閻魔地蔵尊へ。「六道」といえば京都に冥界への入り口として有名な六道珍皇寺があるが、大阪ではこの地蔵尊。ここは六本の道が交差する（現在は七本）。地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道。この輪廻転生、どこから来てどこに帰るのか。閻魔さまにしっかりお参りした。

次に生根神社。住吉神社の摂社として鎮座する。祭神は出雲生まれの少彦名尊である。摂津国住吉郷に式内大社に列する格式の高さを現わしている。又、境内に天満宮が祀られ、奥の天神として信仰を集めてきた。ご本殿は流れ造り、千鳥唐破風を備え屋根は檜皮葺で大阪府の有形文化財に指定され、本殿北西に鎮座する天満宮の木像天神座像は大阪市の有形文化財になっている。宮司さんの御都合がつかずお話をお聞きすることができなかったことは、とても残念に思う。

いよいよ小説の舞台のモデルとなった粉浜商店街を歩く。明治四十年、粉浜のお米屋さん達によって開かれた古い商店街である。最近の空き店舗の目立つシャッター商店街とちがい活気があった。たこ焼き屋もある。お惣菜屋さん、陶器のお店など多種多様なお店が軒を連ねる。お昼のおかずに紅生姜の天ぷらを買う。「はい、ひと皿 100 万円」おばちゃんのツッコミにやっぱり大阪や。住吉公園で昼食をとる。おにぎりのおかずに先程の生姜の天ぷら。おいしい。大阪の味だ。公園で遊ぶ子供達もツッコンでくる。「どこ行くんですか。気いつけてください」やっぱり大阪や。

午後、芭蕉句碑の前を出発。潮街道といわれる石畳を行く。ここは高燈籠から住吉大社へ参拝する渡航者たちの参道であった。今日はその反対にある高燈籠を目指す。日本最古の灯台とされ、今は地元の保存会の事業で資料館となっている。ここ住の江は難波津と共に万葉集にも多くの歌が詠まれている。かつて海に面していたという住吉の美しい白砂青松の風景がしのばれる。

高燈籠

高燈籠見学後、細井川に沿ってたどり、その河口であった細江へ。遣唐使がここから出航したと説明を受ける。そして最終目的地「すみよっさん」の住吉大社へ。そのシンボル太鼓橋を渡る。「反橋はおりる方がこはいものです」という川端康成の『反橋』文学碑を読んで、一歩一歩ゆっくりおりる。＜おりる方がこわい＞と実感する。住吉大社はあまりに有名だが私は初めてだ。案内のパンフレットに境内があまりに広く、今日は拝観・見学を断念。また改めてお参りに来よう。

帰りはどうして帰ろうか。これも、はじめての南海電車に乗ってみようか。迷ってうろうろしているうちに、帰りにもう一度ゆっくり歩いてみたいと思っていた粉浜商店街に行けず、結局、南海電車に乗ってしまった。

＜報告：松浦裕子＞